

女性移住者の人間関係形成と居場所づくり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2022-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米澤, さくら メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028560

女性移住者の人間関係形成と居場所づくり

米澤さくら

1. はじめに
2. 興津の人口変化・女性に関わるコミュニティ・年中行事について
3. 女性移住者の人間関係形成と居場所づくり
 - 3.1 夫が家業を継ぐ形での移住
 - 3.2 結婚を機に夫の地元へ移住
 - 3.3 夫婦ともに興津地区外から移住
 - 3.4 単身で興津地区外から移住
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

本章では、静岡市清水区興津地区における女性移住者への聞き取り調査を通して、彼女たちの人間関係形成、居場所づくりについてみていく。

はじめに、本章において使用する「居場所」という言葉について確認したい。ここで用いる「居場所」は、自分が存在する物理的な場所という意味ではなく、安心できるところ、心のよりどころ、さらには自分が必要とされる場所というように、心理的な意味を持つものとする。また、田所承己が「誰かと〈つながる〉ことは、自分の“居場所”があるという感覚をもたらしてくれる」（田所 2014：13）というように、居場所づくりには人間関係形成が大きく関係している。そのため、本章では、人間関係形成に焦点を当てて、女性住者の居場所づくりについて考えていく。

私は以前から、人々の地元への帰属意識、地元への愛着や思い入れについて関心を持っていた。引地博之らによれば、地域に対する愛着には、住民同士の交流といった、地域内の社会生活を円滑にする対人関係が強く関連しているという（引地他 2009）。であるとするれば、人間関係が存在しない新しい土地で生活を送らざるを得ない移住者は、どのようにして移住先で新たに人間関係を形成し、自らの居場所をつくりだしているのだろうか。

また、今回の調査において私は、移住者のなかでも女性に焦点を当てることにした。日本では、男性が外で働いて家計を支え、女性が家庭内で子育てや家事を担うという風潮が

未だに根強い。そのため男性に比べ、勤務先といった家庭外と接する機会が少ない女性は、自ら積極的に行動しなければ人間関係形成の機会はなかなか訪れないのではないだろうか。特に、結婚を機に他地域から移住してきた女性たちは、友人も親戚もない、新しい土地で暮らす中で、孤独を感じることもあるだろう。しかし、人間関係を広げようとしても、家庭内での仕事を主に担う女性たちが、そのきっかけを得るのは難しいと思われる。そのような状況において、人はどのように自分の居場所づくりをしているのか知りたいと思い、女性移住者に焦点をあてることとした。

以上の問いを基本にもつ本章では、女性移住者の居場所づくりについて、彼女たちの語りから探っていく。居場所づくりには、子ども会やPTA、ママ友といった子どもを介した人間関係から、自治会の活動や地域におけるイベントを通してつくられる住民同士の互助的な人間関係などが関係していると考えられる。インタビュー調査でも、女性移住者の人間関係形成の過程には、人と人をつなぐ様々な媒体が存在することが確認できた。また、それらは年代や移住の背景によっても様々であった。これを踏まえて本章では、女性移住者が人間関係を形成する際、その媒体としてどのような縁があったのかについても、移住の時期や経緯の違いとともに注目したい。

2. 興津の人口変化・女性が関わるコミュニティ・年中行事について

本節では、女性移住者の事例をみていくうえで基本情報となる興津の人口変化とその要因、そして女性が関わる組織や団体とその特徴、地区の年中行事について説明する。

興津地区の人口は2021（令和3）年6月30日現在、12,136人である。1980（昭和55）年から2015（平成27）年の国勢調査と2021年の住民基本台帳のデータを図1にまとめた。大きな減少は見られないが、過去40年をみると、2000（平成12）年頃を境に人口減少が進んでいることがわかる（図1）。

次に15歳未満の年少人口に注目してみる。興津地区における15歳未満の人口は、1980年から2021年にかけての41年間で6割減少している（図2）。これは全体の減少率を大きく上回っており、興津地区では少子化が顕著であることがわかる。

図1 興津地区の人口推移

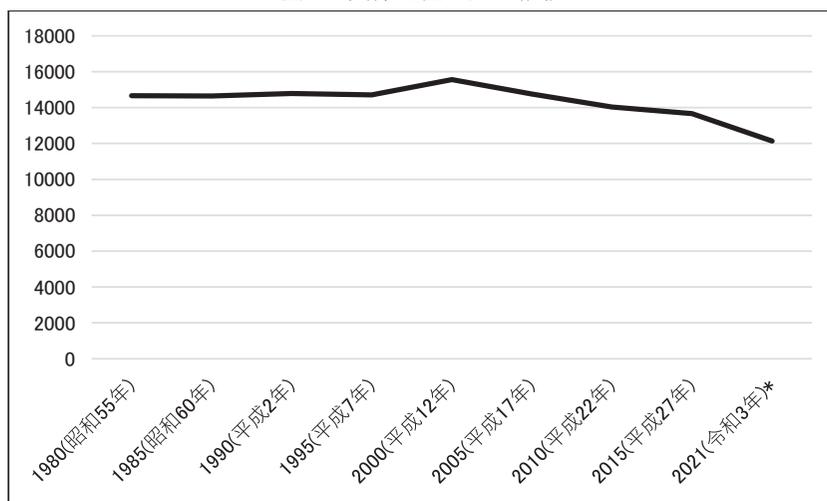
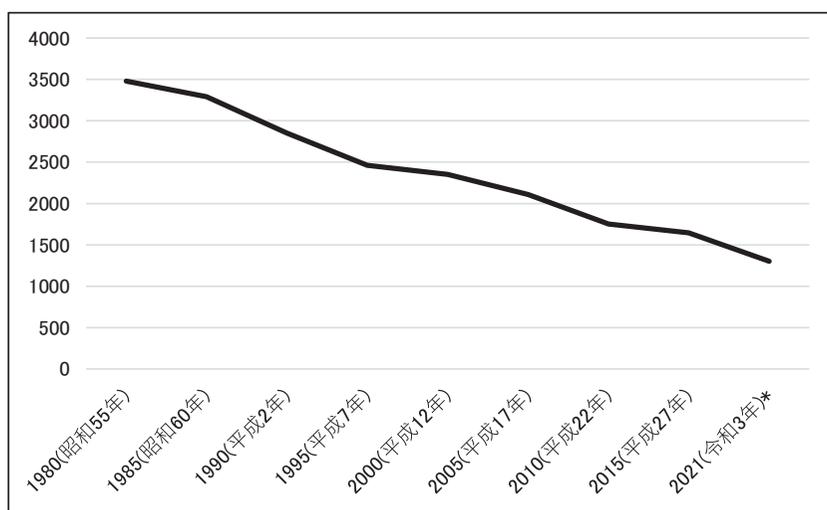


図2 興津地区の15歳未満人口推移



(出典: 図1、2ともに国勢調査人口資料、および静岡市ホームページ「静岡市の人口・世帯(住民基本台帳の過去データ)」をもとに米澤作成)

ところで、今回の聞き取り調査においては、興津では娘が婿を取るケースが多いとか、興津出身の女性が結婚後、他所出身の夫と地元に住むケースが多いとか、さらには地元どうしの結婚が多いといった話も聞かれた。また、他所から移り住んだ女性のなかには興津の立地の良さが移住理由の一つであるという人もいた。興津は政令指定都市である静岡市の一部であり、静岡駅まで4駅(約15分)、清水駅までは1駅(約5分)と市街地にもア

アクセスしやすい。静岡駅から新幹線に乗り換えれば、他県への移動も容易である。また、海岸線には国道一号バイパスが通っており、清水や静岡へはもちろん、それ以外の県内各地への通勤、他県への移動もしやすい。さらに、三方を山に囲まれ、南には駿河湾、そして東部には清流で知られる興津川が流れており自然を身近に感じることができる。市街地へのアクセスが良好でありながら、自然にも触れ合える立地である。

次に女性が関わる組織・団体についてである。自治会や子ども会、PTA といった制度的なものから、サッカー少年団や野球チームの父母会、交流館でおこなわれている女性学級や料理、英会話といった教室など多種多様なものが存在する¹⁰。このうち、興津の子ども会は、加入率がほぼ 100%という点に特徴がある。2019（平成 31）年度に興津で調査をおこなった静岡大学文化人類学コースの小田望史によれば、興津では子ども会を通して学校の給食費の集金がおこなわれており、子ども会に参加していないと納入手続きが煩雑になるため、加入率が高くなっているという（小田 2019：25-26）。

最後に地区で開催される年中行事についてである。興津地区連合自治会長の高山さんによるとかつては地域の行事の数、規模ともに今よりも大きく、住民主体で開催される行事が住民間の交流促進に一役買っていたという。『興津三十年史』によれば、1989（平成 1）年の地区体育協会の事業計画は次の通りである。体育協会が開催する行事だけで、これほどの数が確認できた。自治会や子ども会、青年団、婦人会など、体育協会以外の組織が主催する行事を含めると相当な数になると思われる。しかし近年では、生活様式や人々の意識の変化によって、その数は減少している。

月	日	行事	月	日	行事
4	27	地区体育協会総会	8	1	ラジオ体操、早起き走ろう大会
5	7	第 11 回クロッケー大会		20	クロッケー、レインボーリング大会
6	4	自治会対抗父親ソフトボール大会	9	3	興津地区体育祭
	〃	自治会対抗婦人バレーボール大会		10	職場対抗ソフトボール大会
	13	親子体操教室	10	22	自治会対抗年令別ソフトボール大会
7	23	会長杯婦人バレーボール大会		28	第 5 回地区綱引き競技大会
	〃	自治会単位シニヤソフトボール大会	2	28	親子体操教室

表 1 1989（平成 1）年度の興津地区体育協会事業計画
（出典：『興津三十年誌』668 頁の表をもとに米澤作成）

¹⁰ 興津地区連合自治会長の高山茂宏さんによると、自治会単位のものでは興津地区婦人団体連合会（いわゆる婦人会）があったが、女性の社会進出や核家族化の進行、当事者の意識の変化によって自然消滅していったという。

ここまで、興津地区の人口変化や住民組織、年中行事についてまとめてきた。ここからみえてくるのは、人口の減少や少子化、勤務形態をはじめとした生活様式の変化にともなう公的な住民組織の減少、またそれらにともなう地域行事の減少であった。このような状況が移住女性の人間関係形成と居場所づくりにも少なからず影響を与えているであろうことは想像に難くない。続く3節では、これらを基本情報として女性移住者が実際にどのようにして人間関係を形成していったのか聞き取り調査で得られた事例をみていく。

3. 女性移住者の人間関係形成と居場所づくり

本節では、世代や移住の背景の異なる女性たちが、興津に来てからどのようにして人間関係を広げ、どのような人々と関わり合いながら生活を営んでいるのか、様々な事例をもとに明らかにしていく。調査では、興津地区に移り住んだ経歴をもつ9人の女性にインタビューをおこなった。ここでは、女性たちのライフストーリーを、移住の形態ごとに4つに分けそれぞれ世代の高い順に紹介する。移住の形態は、①夫が家業を継ぐ形での移住、②結婚を機に夫の地元に移住、③夫婦ともに興津地区外から移住、④単身で興津地区外から移住、という4つに分類した。なぜこの4種類に分類したかという点、興津とのつながりの有無、そしてその強弱が人間関係形成に影響を与えていると予想したからである。

移住の形態		年齢	出身
①夫が家業を継ぐ形での移住	事例1	85歳	富士市
	事例2	72歳	富士市
	事例3	41歳	静岡市葵区
②結婚を機に夫の地元に移住	事例4	64歳	静岡市清水区
	事例5	58歳	東京都
	事例6	38歳	京都府 横浜市→興津
③夫婦ともに興津地区外から移住	事例7	70代	関東
	事例8	45歳	兵庫県 長崎県→興津
④単身で移住	事例9	30代	千葉県 長崎県→興津

表2 インタビュー対象者の年齢と出身地（聞き取り調査をもとに米澤作成）

3.1 夫が家業を継ぐ形での移住

はじめに、興津で家業を継ぐ夫と結婚し、嫁入りで移住した女性たちの事例をみていく。

<事例1：柿澤佳子さん（85歳女性、富士市富士川地区出身、興津中町在住）>

柿澤佳子さん（1936年生まれ）は、製材屋の娘として旧・庵原郡富士川町（現・富士市富士川地区）で育った。夫の家も製材屋であったことと、母と義母がいずれも静岡県未亡人連合会¹¹に所属していたことがきっかけで、お見合いをすることになり、その後結婚を決めて22歳で柿澤家に嫁いだ。

当時、女性は家庭内での仕事が多く、交友関係は狭かった。しかし、子どもが幼稚園に上がるとPTAの活動を通してしだいに交友関係が広がった。当時、PTAの防災頭巾づくりの活動をするにあたり、みんなで柿澤さん宅に集まって作業したこともあったそうだ。みんなで一つのことに取り組むことがとても楽しかったと柿澤さんは語っていた。

柿澤さんを取りまく人間関係を大きく変える転機となったのが、44歳の時に「興津商工会婦人部」が結成されたことだったという。1980年の結成当初から柿澤さんは婦人部長に選出され、精力的に活動をおこなった。当時、一番下の子どもが中学生で子育てもひと段落していたこともあり、活動に専念することができた。この活動を通して、年齢や出身が様々に異なる友人ができたそうだ。友人たちとは、たとえば親の介護などで大変そうであればおかずをお裾分けするなどして助け合っていたという。1990（平成2）年に柿澤さんを中心に婦人部が作成した『興津商工会「婦人部十周年記念誌」』を見ながら、当時の思い出を語る柿澤さんはとても生き生きとしていた。

1936（昭和11）年生まれの柿澤さんは、22歳でお見合い結婚をしてから家庭内にいることが多かったが、子どもの幼稚園入園をきっかけにPTAなど子どもを介したつながりができた。また、子どもが成人してからは、興津商工会婦人部での活動が、柿澤さんの人間関係のなかで大きな位置を占めていたことがわかる。このように、ライフステージの変化によって、人間関係の媒体が変化し、そこを中心につくられるその人の居場所の在り方も異なってくるのが、柿澤さんの事例から読み取れる。

次に、柿澤さんよりも12歳年下の小澤千代子さんのライフストーリーを紹介する。

<事例2：小澤千代子さん（72歳、女性、富士市出身、興津本町在住）>

小澤千代子さん（1952年生まれ）は、家族とともに興津本町の菓子店「潮屋」を経営している。実家は富士市の農家だったが、高校卒業後に就職した会社の上司の紹介で、実家が菓子店を営む夫と結婚、嫁入りした。当時、興津では周囲の家には婿取りする娘が多

¹¹ 静岡県未亡人連合会は、1951（昭和26）年、戦争未亡人を中心に母子家庭や寡婦がお互いに助け合うために作られた会である。その後、1982（昭和57）年に静岡県母子寡婦福祉連合会と名前を変えた。現在は県内の郡市町の母子会が集まって組織され、ひとり親家庭への情報提供や、ひとり親家庭の健全育成の活動を行っている（静岡県母子寡婦福祉連合会ホームページ）

く、千代子さんのように興津外から嫁に来る人は少なかった。興津のことをなにも知らない状態で、友人もおらず、嫁に来た当初は寂しい思いをしていたという。しかし、子どもが産まれたことで、保護者同士の人間関係ができた。子どもが居場所をつくってくれたと感じているようだ。ママ友グループのようなものもできたが、仲の良い二人が興津出身で、他所で生まれ育った千代子さんにはわからない話が出るときには、少々の疎外感を感じたようだ。また、菓子店に嫁入りした関係で、毎日店先に立っていたため外に出歩くことはほぼなかったという。さらにお客さんは姑目当てで来る人ばかりで、千代子さんが店番をしていても姑が呼ばれることが多く、店でもさみしさを感じるがあったようだ。そんななかでも子どもの面倒見てくれようとするお客さんもいるなど、地元の人のかさを感じること多かったという。

千代子さんは菓子店に嫁いだが、見知らぬ土地で頼れる友人もおらず、当初は孤独さを感じていたようであった。子どもが産まれて外で遊ぶようになり、子どもを介した人間関係が広がった。その後、姑から店を引き継ぎ、店を通した人間関係も強くなっていった。現在は交流館でおこなわれている太極拳のサークルに参加するなど店以外でも人間関係ができていく。つまり、事例1の柿澤さんと同じように、ライフステージの変化による人間関係の媒体、居場所の在り方の変化がみられる。しかし、千代子さんの場合、店を引き継いでからは菓子屋での接客で広がった人間関係が生活の基盤となり、店自体が居場所となっていることが伺えた。次に、千代子さんの長男の妻である仁美さんの事例を紹介する。

<事例3：小澤仁美さん（41歳、女性、静岡市駿河区出身、興津本町在住）>

小澤仁美さんは、事例2で紹介した小澤千代子さんの長男の妻で、千代子さんとは姑と嫁の関係である。仁美さんは、夫と結婚してしばらくは夫婦だけで暮らしていたが、1人目の子どもが産まれる少し前に、夫の実家で義父母と同居することにした。出産後も平日は保育園に子どもを預けて結婚前から務めていた会社へ働きに出ていた。保育園では同じように働きながら子育てをする母親が多く、ママ友同士、互いに大変なこともわかり合える関係だったという。

その後、将来のために店の仕事をできるようにしたいという思いと、姑の負担を減らし、もっと自由な時間を持ってもらいたいという思いから、二人目の出産を機に32歳で仕事を辞めた。本格的に店に立つようになると、お客さんを中心に顔見知りの関係が増えていった。例えば、地域の方から「潮屋」の人として認識され、自分の知らないところで知ってもらえていることもあるようだ。最近の人づきあいは、7割くらいは仁美さん個人というよりも、「潮屋」としての付き合いであるという。なかでも義母（事例2の千代子さん）がこれまでに客や地域の人との間に築いてきた関係は店の基盤となっており、見知らぬ土地で店に立つ仁美さんにとってとても心強いものだったという。

友人関係について聞いてみると、若いときは友人の在り方が変化しているとのことだ

った。お客さんと喋ったり家族と喋ったりすることがストレス解消にもなっているので、時間がないなかで無理に新しく友人をつくらうとする必要はないとも言っていた。興津は人との距離が近く、近所の人が子育てを手助けしてくれることもあるという。子どもが頻繁に通っていた図書館の職員さんも、よくお店のお菓子を買いに来てくれたので、顔見知りだった。また、仁美さん自身も近所の人との関係において「あいさつ」を大切にしているようで、取材時にも登下校中の子どもたちに笑顔で声をかけていた。

仁美さんの事例からは、子育てをしていくなかで、保育園のママ友同士やPTAで知り合った保護者など人間関係を作る場が変化していることがわかる。また、事例2の千代子さんと同じく、家業を通じた人間関係が仁美さんにとって大きな存在であることもみてとれる。「潮屋」の奥さんという地域の人々からの認知は興津における人間関係の基盤となっている。私が店舗に伺った際には、千代子さんと嫁の仁美さん（次の事例3で紹介）が店頭に立っており、訪れるお客さんと二人が親しげに話す姿も見られた。そうした様子からは、潮屋が地域の人々にとっての居場所となっていることがうかがえた。

夫が家業を継ぐ形で、嫁として興津に移住した女性でも、特に実際に店頭に立って顧客とやり取りする潮屋の二人の事例で見られた特色として、店を介した店員と客という関係性から生まれるつながりが挙げられる。

続いて、結婚を機に夫の地元へ移住した3人の女性の事例をみていく。

3.2 結婚を機に夫の地元へ移住

<事例4：池ヶ谷初美さん（64歳、女性、静岡市清水区出身、八木間町在住）>

池ヶ谷初美さん（1957年生まれ）は、旧清水市（現・静岡市清水区）に生まれ、大学で音楽を学んだのち、結婚前から実家がある清水でピアノ教師とコーラス指導をおこなっていた。結婚後、夫の地元である興津に移住したが、子どもが産まれるまでは、ピアノとコーラス指導のために頻繁に実家へ帰っていたため、興津の人との交流はほとんどなかった。子どもが産まれ小学校に上がると、興津小PTAからPTAで行っているコーラスの指導を頼まれ、引き受けた。子どもが中学生の頃、コーラスで親しくなった雨宮令子さん（NPO法人AYUドリーム理事長）にPTA役員を頼まれた。その後、中学、高校と引き受け続けるうちに、役員の仕事に魅力ややりがいを感じるようになったという。池ヶ谷さん曰く、PTAの役員は面倒くさい、といったネガティブなイメージを持たれがちだが、普段見ることのできない学校の様子、そこでの子どもたちの様子を見ることができると、活動を通して人脈を広げられるといった良い点もたくさんあるそうだ。

現在は、NPO法人AYUドリームの会員として、生涯学習館内に併設されている「あゆむカフェ」の経営をボランティアとして手伝っている。取材時にも、交流館内で開かれて

いる「女性学級」を終えた人たちがたくさん訪れていて、池ヶ谷さんは彼女たちとともに楽しそうに笑顔で話していた。その様子からは地域の人たちとの距離感の近さが感じられカフェはもちろん池ヶ谷さん自身も地域の人々から親しまれているようであった。

以上のように、池ヶ谷さんはPTA役員やNPO法人の会員として活動することを通して、たくさんの人と関わり、親しい関係を築いてきた。池ヶ谷さんは前述した通り清水出身であるが、現在では興津出身と間違えられるほど興津に馴染んでいるという。私がインタビューを依頼した際にも、「人生の半分以上が興津だから、ほとんど興津の人だけで私で大丈夫?」と話していた。このことから、池ヶ谷さんの居場所がしだいに清水から興津に変わってきたことがわかる。また、池ヶ谷さんも子育て期のPTAから、子育て終了後のNPOへと活動する場、人間関係の媒体が変化していることが指摘できる。次に、結婚を機に興津に移住し、PTAや地域内の役員活動をきっかけとして人間関係が広がった女性移住者の事例をみていく。

<事例5：杉山正子さん（58歳、女性、東京都出身、興津中町在住）>

杉山正子さん（1963年生まれ）は東京都で生まれ育ち、結婚と同時に興津中町の夫の実家近くに居を構えた。興津に来た当初は知り合いがおらず寂しい思いをしていたそうだ。そんななか、運転免許を持たない義母の運転手として、義母の習い事や買い物の送り迎えをするようになってから、運転の最中に色々な場所を教えてもらうことができ、土地勘が養われていったそうだ。また、義母の友人を乗せることもあり、顔見知りの関係も広がっていき、「杉山さんとこのお嫁さん」として周囲に認知されるようになったという。

結婚した翌年に子どもが産まれると、子どもを連れていく公園でほかに遊んでいる子どもの親たちと仲良くなった。幼稚園に上がるとPTAを介してママ友ができた。また、子どもがサッカー少年団に所属してからは、そこでも保護者同士の強いつながりができたという。少年団では食事に行くような親しい関係の友人もできたそうだ。

以上みてきたように、杉山さんが興津で人間関係を築き始めたきっかけは、義母を通して嫁として周囲から認知されることであった。その後、子どもが産まれるとPTAや習い事といった子どもを介した人間関係の広がりがみてとれる。次に、子育てをきっかけとして、2010年代に夫の地元で家族で移住した板谷苑利香さんの事例をみていく。

<事例6：板谷苑利香さん（38歳、女性、京都府出身、八木間町在住）>

板谷苑利香さん（1982年生まれ）は京都府出身で、興津に来るまでは夫の仕事の関係で名古屋、横浜などで暮らしていた。横浜で子どもを出産し子育てをしていたが、もっと子育てしやすい環境で生活したいと思い、帰省で年に何回か訪れていた夫の地元である興津に住むことを考えたそうだ。興津は自然に恵まれているが、田舎すぎることもなく子育て

に適していると考えていたという。その後、夫に転職してもらい、2018（平成30）年に興津に移住した。義父母は夫の転職について納得していなかったため、はじめは居づらさを感じたという。下の子どもが年長の年に興津こども園に入園した。しかし、年長から入園する子は少なく、保護者の間にはすでに人間関係ができあがっており、輪に入り込み辛い雰囲気があったそうだ。興津に来て初めて仲良くなったのは、あるお寺の奥さんで、互いに公園で子どもを遊ばせているときに会った。どちらも県外出身で結婚を機に興津に移り住んだことから共通点も多く話が弾み、意気投合し一気に距離が縮まった。また、岩崎奈緒子さん（事例10で紹介）とも、子ども会絡みで出会い、同じ関西出身だったこともあり、様々な共通点から話も弾み、仲良くなったそうだ。

ところで、板谷さんは子どもと過ごす時間を増やしたいという思いから、勤めていた仕事を辞めて2021年4月に自宅で英語教室を開いた。これがきっかけで生徒の保護者や大人の生徒と関わりができたという。大人の生徒が「良いことやっているね」と言ってくれたのが心に残っていて、その言葉が今の原動力となっていると語ってくれた。興津に移り住んだ当初は居づらさを感じることがあり大変なことも多かったが、今では来てよかったと感じているそうだ。

板谷さんは、下の子どもが年長の年に興津に移住した。興津は夫の地元ではあったが、地縁はほとんどなく、子どもを介したつながりのほうが強かった。また、先述したように加入率がほぼ100%である興津の子ども会は、個人がつながるか、つながらないかを選択できない縁である。しかし、そのような制度やルールが生み出した縁のなかには共通点が多く話の合った岩崎さんとの関係のように、より親密なものに発展するものもある。また、英語教室を始めてからは生徒との関わりが出来た。新しいことへのチャレンジを通して、必要としたり必要とされたり、助けたり助けられたりという互酬性がうまれ関係が形成されていく、という一例をみることができた。

次からは夫婦ともに興津地区外から移住した血縁や地縁が薄いと思われるケースをみていく。

3.3 夫婦ともに興津地区外から移住

<事例7：Bさん（70代、女性、関東地方出身、興津地区在住）>

Bさんは、夫婦ともに興津外出身であり、夫の仕事の関係もあって結婚後は清水市内でアパート暮らしをしていたが、子どもが生まれて手狭になったため引っ越すこととなった。交通の便が良く、田舎過ぎず都会過ぎず住みやすそうだったことから、興津に家を建てようと決めたという。

興津に移り住んでからは子どもを連れて散歩することが多かった。当時（昭和50年頃）は子どもの数も多く、公園や近所の道端ではいつも子どもが遊んでおり、親も子ども

を見守りながら、親同士で世間話をするなどしていた。やがて、子どもが幼稚園に入ると、保護者同士で知り合いになった。また、小学校でPTAの役員となったことで、さらに人間関係は広がった。当時PTAで開催していたバレー大会に参加したところ、ママさんバレーチームに誘われて加入し、そこでも友人ができた。人間関係が広がる一方で、当時は今よりも町内縁、近所縁といった地縁的なつながりが色濃く存在していたため、閉鎖性を感じることも何度かあったという。子育てが一段落した後は、パートとして働き始めた。パートの仲間は共に過ごす時間が長く、歳も近くて子どもの年齢も同じくらいであったことから、他所での人間関係よりも濃く、親しい関係だったという。現在は退職しており、サークル活動に参加したり友人と遊んだりするよりも、図書館に行ったり家で読書をしたりして日々を楽しんでいるという。

<事例8：岩崎奈緒子さん（45歳、女性、兵庫県出身、興津中町在住）>

岩崎奈緒子さんは、果樹研究所に勤める夫の転勤にともない、子どもが2歳の頃に長崎から興津に移住した。最初の3年は宿舎で暮らしていたため、宿舎の外の人との交流は少なかった。また、当時は定住するつもりもなく、積極的に興津の人々と関わろうとしなかったという。公園へ行ってもほとんど人を見かけないし、図書館の「お話会」（読み聞かせの会）などのイベントに顔を出してみても参加者が少なく、興津に住む人と関わる機会はほとんどなかった。そのため子育て支援等の情報を得るのも一苦労だったそうだ。当時は主に長崎の研究所時代から一緒に仲間と過ごしていたという。

その後、子どもたちのことを考えて定住を決意した。そのために「家を建てる」という出来事がターニングポイントとなり、興津でネットワークをつくらうと思うようになったそうだ。興津に来た当初は専業主婦だったが、定住することが決まり、ネットワークづくりになればと、清水区内の中学校の図書館司書の仕事に就いた。また、今は先生や保護者とのつながりが広がるという狙いもあって、あえて岩崎さんは子どもを興津の習い事教室に通わせているという。また岩崎さんは子どもの就園前に興津に来たため、幼稚園での人間関係が小学校でも続いていて、子ども会では事例6の板谷さんのような友人ができた。さらに子どもがガールスカウト¹²に入っているため保護者同士の関わりもあるという。

以上みてきたように、岩崎さんは興津に定住することが決まった後、人間関係を広げようと積極的に情報を収集し、様々なイベントに参加したり、仕事を探したりしていた。夫と二人で長崎に住んでいた頃は地域に馴染まなくても生活するうえで困ることはなかったが、子どもができ、興津に定住することが決まると興津での人とのつながりを求めるようになった。暮らしに関する情報収集という観点でも人間関係は重要なものであることがわかる。また、子どもを介したものがほとんどであるが、母親としてではなく岩崎さん個人

¹² 興津のガールスカウトについては齊藤による本報告書第8章も参照。

としての人間関係も広げようとしていた。

ところで、今回の調査で岩崎さんは、筆者のために興津地区外出身の女性を知っていたら紹介してほしいと知り合いに聞いて回ってくださった。岩崎さんのご協力がなければこの調査はこれほど順調に進むこともなかった。この場を借りて謝意を表したい。一方、岩崎さんによれば、この調査をきっかけに話すことができた人も多く、調査そのものがネットワークづくりに繋がったとのことだった。このことから、人が行動を起こすことはネットワークを様々に広げる可能性をもつという気づきを得ることができた。

さて、ここまで既婚女性の例を示してきたが、最後の事例となる次項では、転勤で興津に住むことになった单身女性の語りをみることにする。

3.4 単身で興津地区外から移住

<事例9：Cさん（30代、女性、関東地方出身、興津地区在住）>

Cさんは関東出身で、果樹研究所の職員となり、単身で興津にやってきた。研究所の宿舎ではなく興津地区内のアパートで暮らしている。興津で積極的に交友関係を広げようという気持ちはあまりなく、実際に興津での人間関係は職場周辺が主だそう。果樹研究所には正規職員だけでなく、パートで働く地元の人もいる。そのなかに家でミカンを作っている人もおり、専門知識を持つCさんはよく情報交換をするそう。また、別のパートの人とは一緒にタケノコ掘りに行ったり、友人を紹介してもらったりして、年齢の違いを気にすることなく交流しているという。しかし、Cさん自身は人脈やそこから得られる情報の不足で暮らしに困ることもないため、自分から交友関係を広げる必要をあまり感じないそう。自治会の活動については、参加を強く強制されることもないし、自分でも積極的に参加しようとは思わないため、関わりは少ないという。

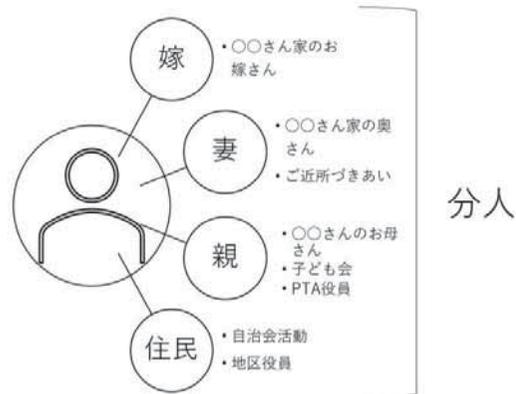
単身のCさんの場合、興津で暮らすなかで人間関係を広げることに力をいれていないが、特に不自由は感じていないことがみてとれる。一方、Cさん以前に紹介した事例は、すべて子育てというライフステージにある女性、あるいは経験した女性たちである。彼女たちに共通しているのは、子育て期間中において子どもを介した人間関係の形成が顕著であることであった。子育てにおいては、保育園や学校、習い事といった子どもの教育の場において、保護者同士の交流のきっかけがつけられ、それを入口として新しい人間関係が広がる。ここでの人間関係は、子を持つことで女性たちのなかに新たに生じた「親」という役割を媒体としてつくられるものである。つまり、ライフステージの変化とは、結婚や出産といったイベントにおいて、その人のなかに「妻」や「嫁」、「親」といった新たな役割が生じることだと言い換えられる。そうして増えた役割が媒体となり、以前とは違った方向に人間関係を広げるきっかけとなっているといえる。

続く4節ではこれまでにみてきた事例を踏まえて興津における女性移住者の人間関係、そして居場所づくりについて考察していく。

4. 考察

興津に移住した女性たちは、それぞれのもつ背景に合わせて様々な人間関係をつくっていた。それらの多くは移住先で上手く暮らしていくために重要なものであるように見受けられた。このつながりは一見すると、ナン・リンが、「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源」であると定義するソーシャル・キャピタルであるように考えられる（リン 2008：32）。しかし、リンはソーシャル・キャピタルを「個人」が活用する資源と定義しているが、彼女たちの語りからは、唯一無二の「個人」としてではなく、「嫁」や「妻」、「親」など場面ごとに換わる様々な人格を持ち、人間関係を形成していることがみてとれる。平野啓一郎は、このように相手や場所次第で変わる自分のイメージを、分割不可能な「個人 individual」ではなく、分割可能な存在である「分人 dividual」という言葉で表現している（平野 2012：36）。「嫁」として興津にやってきた女性は、「嫁」として周囲の人々に認知され、居場所がつくられていく。その後出産を経て「親」となり「親」として人間関係を広げ、子育てがひと段落すると、「嫁」でも「親」でもなく、また別の人格として交流館のサークルに参加したり習い事に通ったりするなどして人間関係をつくる。また、平野は、対人関係ごとの様々な自分のことであり、相手との反復的なコミュニケーションを通じて、自分のなかに形成されていくパターンとしての人格が分人であるとしている。また、一人の人間には、いくつもの顔があり、複数の分人を抱えているという。今回調査に協力してくれた移住女性たちも、それぞれ「妻」や「嫁」、「親」、「店主」、「住民」など複数の分人を抱えていたことがわかる（図 3）。そしてそれらを媒体として人間関係を形成しており、そしてそれらの変化にともない彼女たちにとっての居場所も変化しているものと考えられる。

図3 分人



(事例をもとに米澤作成)

5. おわりに

これまで、興津地区に住む移住女性たちがどのような経緯で興津にやって来て、それぞれがどのようにして人間関係をつくり、自らの心よりどころとなる居場所をつくっていったのかをみてきた。このテーマを設定した当初は誰もがその土地で快適に過ごすために、自ら居場所を求めて人との関わりをつくっているものだと思っていた。しかし、様々なバックグラウンドを持つ人々の話を聞くなかで、無意識のうちに自分のなかの「あたりまえ」をテーマに押し込めてしまっていたことに気がついた。

興津には、地元の人々が長年培ってきたつながりの強さがときに閉鎖的に見える一面もある。しかし、地域の強いつながりが、地域での子育てや見守りという助け合いの雰囲気を作り出しているようにも感じた。また、興津本町自治会長の大木伸之さんによれば、以前に比べて興津地区への移住者へ増えているという。大木さんは、「本町自治会館を建て替える際には、子どもからお年寄りまで地域の住民が気軽に立ち寄れて交流できる場所にしたい」と語っていた。興津の町も変化の過渡期にある。

謝辞

今回の調査を実施するにあたって、多くの方々にご協力いただきました。急な申し出にもかかわらず、貴重なお時間を割いてお話を聞かせてくださり、ありがとうございます。

参考文献

興津地区誌編集委員会編

1992 『興津三十年誌』興津地区町づくり推進委員会。

長田攻一・田所承己

2014 『〈つながる／つながらない〉の社会学』弘文堂。

小田望央

2019 「住民組織からみる地域と子育て」『令和元年度フィールドワーク実習報告書：静岡市興津』静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース：22-33頁。

静岡県母子寡婦福祉連合会ホームページ

「団体概要」

(<http://shizubon.boshizun.com/dantaigaiyo.html> 2021年10月13日取得)。

静岡市ホームページ

「静岡市の人口・世帯（住民基本台帳の過去データ）」

(https://www.city.shizuoka.lg.jp/000_001587.html 2021年10月16日取得)。

ナン・リン

2008 『ソーシャル・キャピタル－社会構造と行為の理論－』筒井淳也・石田光則・三輪哲・土岐智賀子訳、ミネルヴァ書房。

引地博之・青木俊明・大淵憲一

2009 「地域に対する愛着の形成機構－物理的環境と社会的環境の影響－」『土木学会論文集 D』65巻2号：101-110頁

平野啓一郎

2012 『私とは何か「個人」から「分人」へ』講談社。